九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

張隲『文士伝』について

松浦，崇
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9783

出版情報：中国文学論集. 7, pp.17-27, 1978-06-20. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

張隲『文士伝』について

松浦崇

一

梁の鍾嶸（四六九～五一八）は、『詩品』中品の序において、晋宋の文学評論書を次のように批判している。

陸機の文賦は、通にして貶無し。李充の翰林は、疏にして切ならず。王微の鴻宝は、密にして裁無し。顔延の論文は、精にして暁り難し。摯虞の文志は、詳にして博贍、頗る知言と曰ふ。斯の数家を観るに、皆な就きて文体を談じ、優劣を顕はさず。謝客の集詩に至っては、詩に逢へば輒ち取る。張隲の文士は、文に逢へば輒ち書す。諸英の志録、並びに義は文に在りて、曽て品題すること無し。

この中で鍾嶸が最後に挙げている「張隲の文士」、すなわち張隲の『文士伝』について考察するのが小論の目的である。

『隋志』や新旧『唐志』によれば、『文士伝』は本来五十巻あったというが、すでに亡佚していて今日ではその完全な姿を見ることはできない。しかしながら、『世説新語』や『三国志』などの注、『太平御覧』などの類書に、断片的ではあるが数多く引用されており、後漢及び魏晋の文人の貴重な伝記資料を提供している。ところが、これまでこの『文士伝』の輯本がなく、そのために色々不便を感じていた。そこで私は自らそれらを集めて輯本を作ってみた。小論では、私が『文士伝』の輯本を作る過程で気がついたことを述べてみたい。

それは大きく分けて二つある。一つは、『文士伝』は誰によっていつ頃編まれたのかということ。もう一つは、この書物が中国の文学批評史の上でどのような意義を持っているのかということである。

ところで、建安時代の曹丕・曹植から、西晋の陸機を経て、劉勰の『文心雕竜』・鍾嶸の『詩品』・昭明太子の『文選』へと連なる文学評論の発展過程は、中国の文学批評史の上でも画期的な出来事であった。けれども、

これはいわば（文学理論の）理論的な頂点を代表するものであって、その下部には、かなり厚い層をなす裾野の広がりがあった。そして何よりも、それらの理論・批評の出現を必然ならしめた文学的な風土があった。

と指摘されているように、[1]今日ではその内容をほとんど知り得なくなってしまった文学論も決して少なくない。鍾嶸が挙げた宋の王微の『鴻宝』や顔延之の論文（『庭誥』といわれる）なども、そして私がこの小論で取り上げる張隲の『文士伝』もその中に含まれよう。こうした書物に対する研究は、その全体像が見られないというハンディがあって、必ずしも十分とは言えないようである。しかし、「厚い層をなす裾野」に埋もれているこれらの文学論の実体を掘り起こしてこそ、この時代の「文学的な風土」が一層はっきりするのではないだろうか。私が張隲の『文士伝』をあえて俎上に載せたのも、こうした展望に基いているからに他ならない。

二

『文士伝』を論ずる上で欠かせないのが、編者の問題である。しかし、編者と伝えられる張隲の閲歴は何一つわからない。それよりも前に、編者が本当に「張隲」という名前なのかもはっきりしていない。というのは、『隋書』経籍志は、張隲ではなく、「張隱『文士伝』五十巻」と記録しているし、「張隱『文士伝』に曰く」という引用もかなりあるからである。また、張隱の方が正しいと言う人もいる。

『文士伝』を載せている目録や引用書などのうち、編者の名前を明記しているものは次の通りである。

(1)「張隲」に作るもの……『詩品』中品序・『旧唐書』経籍志・『新唐書』芸文志・『通志』芸文略・『玉海』芸文類・『三国志』巻二一注・『後漢書』巻六〇下注・『文選』巻三八注・『太平御覧』巻四六四・同書巻五一二

(2)「張隱」に作るもの……『隋書』経籍志・『宋史』芸文志・『崇文総目』・『三国志』巻九注・『北堂書鈔』巻一六〇・『初学記』巻一二・同書巻一八・同書巻二五・『太平御覧』巻三五一・同書巻四〇九

(3)「張衡」に作るもの……『三国志』巻一〇注・『初学記』巻一七

(4)「張瑩」に作るもの……『初学記』巻二〇

(5)「張鄡」に作るもの……『太平御覧』巻四三八

これらのうち、引用書の数が少ない(3)・(4)・(5)は恐らく誤まりであろう。問題は(1)と(2)のいずれが正しいかであるが、一見しただけでは容易には判定できない。そこでこの問題について詳しく述べることにしよう。

まず、張隲が正しいとする説[2]は、鍾嶸の『詩品』・李善（?～六八九）の『文選』注・李賢（六五一～七二）らの『後漢書』注など、比較的早い時期に書かれ、しかも信憑性の高い書物がいずれも「張隲」に作っていることや、『旧唐書』経籍志・『新唐書』芸文志の記録などがその論拠となる。また、これはあまり参考にはならないが、使用頻度の少ない「隲」の字から「隱」の字に書き誤る可能性はあっても、よく使う「隱」の字から「隲」の字に書き誤る可能性は少ないのではないかとも考えられる。しかしながら、張隲の方が正しいとしても、この人の名前を歴史書の中から検出することはできない。

これに対して、張隱の方が正しいとする説[3]は、虞世南（五五八～六三八）の『北堂書鈔』・徐堅（六五九～七二九）らの『初学記』などの引用や、『隋書』経籍志の記録がその論拠となる。そして決定的な

論拠は、張隠という人物が実在していて歴史書の中にはっきりと記されていることである。その歴史書とは次に挙げる『晋書』巻六六の陶侃伝である。

（范）逵、廬江太守張夔に過り、之（＝陶侃）を称美す。夔、召して督郵と為し、樅陽の令を領せしむ。……夔、侃を察して孝廉と為し、洛陽に至り、数しば張華に詣る。華、初め以て人を遠ざけ、甚だしくは接遇せず。侃、往くごとに神に忤色無し。華、後に与に語りて、之を異とし、郎中に除す。……侃、巴陵に旋り、因りて鎮を武昌に移す。侃、張夔の子の隠に命じて参軍と為し、范逵の子の珧を湘東太守と為し、……凡て徴時に荷くる所、一餐すら咸な報ひたり。

この資料によれば、陶侃（二五九～三三四）は、若い頃自分を張夔に紹介してくれた范逵や、樅陽令に抜擢し、更には洛陽の張華に紹介して郎中になる足掛かりを与えてくれた張夔らの恩に報いるために、後年、范逵の子の范珧を湘東太守に、張夔の子の張隠を参軍にそれぞれ登用したという。

陶侃が鎮を武昌に移したのは東晋の成帝の咸和四年（三二九）、侃が七十一歳のことである。当時彼は太尉・侍中という高位にあった。南方出身の陶侃が北来の東晋政界のこうした要職に就けた遠因には、范逵や張夔らの力が働いていたのである。

この『晋書』の記事から、張隠という人物が廬江太守張夔の子であり、陶侃によって参軍に登用されたことがわかる。また、三二九年に起家したとすれば、張隠は西晋のごく末期から東晋初期に生きたと推定される。

張隠がこのような人物であるならば、それでは『文士伝』の編者はこの張隠であると断定してよいのだろうか。この点は『文士伝』の成立年代がわかれば、おのずと明らかになる可能性があるので、次に『文士伝』の成立年代を考えることにする。

『文士伝』の成立年代は、『文士伝』がいつ頃までの人物を載せていたのかということと、『文士伝』を最初に引用した書物はいつ頃書かれたのかという二つの年代推定によって、ある程度まで絞ることができる。

このうち、『文士伝』を最初に引用したと思われる書物は裴松之（三七二～四五一）の『三国志注』であり、これは宋の文帝の元嘉六年（四二九）七月二十四日に宋朝に進上されている。[4] したがって、『文士伝』がこの年よりもかなり前に成立していたことは確実である。

一方、『文士伝』の最後に載せられていた人は、『崇文総目』の注記によれば、宋の謝霊運（三八五～四三三）であったらしい。とすれば、四二九年と矛盾するようであるが、謝霊運の生存中に彼の伝が書かれたと考えられないこともない。

謝霊運伝の佚文は類書などに残っていないので、『崇文総目』の注記が正しいのか何とも言えないが、佚文が残っている『文士伝』の被採録者のうち、最もおそくまで生きたと思われる人に東晋の江績がいる。

江績字は仲元、会稽（王）の主簿と為り、規諫する所多し。（『北堂書鈔』巻六九引『文士伝』）

この原文は「江」を「任」に誤っているが、

（江）績字は仲元、……父、謝氏と穆じからざるを以ての故に、謝安の世に辟召せらるるも従ふ所無く、論者之を多とす。安薨りて、始めて会稽王道子の主簿と為り、規諫する所多し。

（『晋書』巻八三江績伝）

と記されている江績の伝に違いない。

江績が会稽王道子の主簿になった年は、謝安の没年であるとすれば、東晋の孝武帝の太元十四年（三八九）である。また江績の没年は、『晋書』のこの後の記述から推して、同じく安帝の元興元年（四〇二）頃である。

したがって、江績の没年と裴松之『三国志注』進上の年の間、すなわち西暦四〇二年から四二九年の間が最大限に見積もった『文士伝』の成立年代ではないかと私は考える。因みにこの期間は謝霊運の十八歳から四十五歳の間に相当する。謝霊運は四十九歳で世を去っており、『文士伝』がこの間に編まれたとしてもおかしくはない。

さて、『文士伝』が私の推定したように五世紀初めに成立したとするならば、前述の張隠が『文士伝』の編者である可能性はなくなってしまう。なぜならば、張隠が西暦三二九年に仮りに二十歳で起家したとしても、四〇〇年には九十一歳の高齢に達しているからである。したがって、『文士伝』は、従来一部に言われていた張隠ではなく、全く無名の張隠なる人物の手になったと考えざるを得ない。もちろん、前述の張隠と別の張隠であったかもしれないし、あるいは、前述の張隠と張隲の二人が、（例えば親子であって、）長い年月を費して『文士伝』を完成した可能性がない訳ではない。しかし、これ以上深く詮索しても結論は出ないし、その必要もないであろう。

△年表▽

東晋（317～419）	宋（420～478）
三二九　張隠、参軍となる。	
三三四　陶侃没。	
三八五　謝霊運生。	
四〇二　江績没。謝霊運十八歳。	
この頃、張隲『文士伝』成立か。	
四二九　裴松之『三国志注』を進上。	
謝霊運四十五歳。	
四三三　謝霊運四十九歳で没。	

三

では次に、伝記としての『文士伝』について述べることにしよう。

『文士伝』は、『隋志』や新旧『唐志』が史部の雑伝類に置いていることからみて、文字通り文士の伝記であったことは確かである。今日見得る範囲でも六十名以上の文士が採録されていたことがわかっており、彼らの伝記を研究する上で有益な資料も少なくない。けれども、我々がこれを活用しようとする場合、この書物の内容が本当に信頼できるのかどうか、まず疑ってみる必要がありそうである。

『文士伝』の記述の信憑性を知る上で重要なのが、『三国志』注における裴松之の『文士伝』批判である。

案ずるに、孫権は此より以前、尚ほ中国と和同し、未だ嘗て兵を交へず。何ぞ「権を江外に駆ふ」と云はんや。魏武は（建安）十三年を以て荆州を征す。劉備は卻って後数年にして方めて蜀に入り、備は身未だ嘗て関隴を渉らず。而るに荆州を征するの年に於て、便ち「備を隴右に逐ふ」と云ふは、既已に乖錯す。又た白登は平城に在り、亦た魏武の経めざる所なり。北のかた烏丸を征すること、白登と永く相豫からず。（『三国志』魏書巻二一王粲伝注）

これは、王粲が呉の劉琮に対して魏の曹操に帰属するように説得したという『文士伝』の話を裴松之が批判したものである。

この中で裴松之は、「孫権を江外に駆ふ」・「劉備を隴右に逐ふ」・「烏丸を白登に破る」といって曹操の活躍ぶりを説く王粲の言葉がいずれも歴史事実と矛盾することを指摘する。そして、『文士伝』の編者を次のように厳しく批判している。

此を以て、張隲は仮偽の辞にして、其の虚の自ら露はるることを覚らざるを知る。凡そ隲の虚偽妄作は、覆疏すべからず。此のごとき類は、紀すに勝へず。（同前）

裴松之はまた、阮瑀が曹操の辟命を逃がれて山中に隠れ、見つかって伎人の列に加えられると歌曲を作って歌ったという『文士伝』の話も「虚偽妄作」であることを論証する。

案ずるに、魚氏の『典略』・摯虞の『文章志』は並びに云ふ「瑀、建安の初め、疾に辞して役を避け、曹洪が為めに屈せず、太祖の召を得て、即ち杖を投じて起つ」と。（張隲のいう）「逃れて山中に入り」「之を焚きて乃ち出づる」の事有るを得ず。又た『典略』に「太祖初めて荆州を征するとき、瑀をして書を作らしめ韓遂に与ふ。此の二書今具に存す」と載す。長安に至るの前、遂等破れて走ぐ。太祖始めて（建安）十六年を以て関に入ることを得るのみ。而るに張隲は云ふ、「初めて瑀を得し時、太祖は長安に在り」と。此も又た乖戻す。瑀は十七年を以て卒す。太祖は十八年に策して魏公と為る。而るに（張隲は）云ふ、「瑀が歌舞の辞に『大魏は期運に応ず』と称す」と。愈いよ其の妄なるを知る。又た其の辞に「他人焉んぞ能く乱さん」と云ふは、了に語を成さず。瑀が吐属、必ず此のごとからざらん。（同前）

裴松之によれば、「（瑀は）乃ち逃れて山中に入る。太祖、人をして山を焚かしめ、瑀を得たり」という話自体が有り得ない。「太祖時に長安に在り」というのも事実と合わない。「大魏は期運に応ず」という阮瑀の歌もおかしい。そして「他人焉んぞ能く乱さん」という歌も阮瑀らしくない。したがって、この『文士伝』の話は全くの作り話に過ぎないというのである。

実証的に歴史事実を挙げてなされた裴松之の『文士伝』批判は、十分に説得力を持っている。また、『文士伝』の全体を具に検討した上で下した「虚偽妄作」という評価も、恐らく当たっているだろう。今日残された佚文を見ても、『文士伝』が俗説に満ちた書物であったらしいことは想像に難くない。したがって、『文士伝』を活用するには十分に注意する必要があるだろう。

ただ、なぜこの書物には俗説が多いのかという点は、考えてみるべきである。思うにその理由として、一つには、正式な歴史官ではなく、全く無名の一知識人の手によって書かれたということが考えられる。また、時代的な隔たりも大きな一因であろう。前章で推定

したように『文士伝』が五世紀初めに成立したとすれば、阮瑀や王粲らの時代とは約二百年の隔たりがある。それはちょうど、今日の我々が江戸時代の文人の伝記を書くようなものである。今日とは比較にならないほど情報量が乏しい時代であり、しかも、途中に中原の地を北方民族に奪われるという屈辱的な時代を経ているので、俗説が相当の部分を占めていたとしても止むを得ない。更に、地理的な隔たりも見逃がせない。というのは、『文士伝』の編者の経歴はわからないが、どうも南方出身者ではなかったかと思われる点がいくつかあるからである。張隲の「張」という姓は、南朝で勢力を持った呉郡呉の張氏など、南方に多い姓である。『晋書』陶侃伝に出てきた張夏とその子張隱も南人であろう。また、『文士伝』の被採録者に南人が多く、南人に好意的な話も『文士伝』にはある。[5]

『文士伝』の編者が南人かどうか、はっきりと断定はできないが、もしそうならば、『文士伝』が書かれた目的などを知る手掛かりとなるかも知れない。また、北人と南人との対立問題を考える上でも興味深い問題を含んでいるので、今後の検討課題にしたい。

四

以上、裴松之の『文士伝』批判を中心にして、『文士伝』という書物を活用するには十分注意すべきであることを見てきた。それではこの『文士伝』は、単に文士の出身や性格・エピソードなどを綴った、しかも信頼性の極めて乏しい伝記に過ぎなかったのであろうか。この点については、従来の研究――例えば、『詩品』の注釈として定評のある詩品研究班の「鍾氏詩品疏」においても、

この書物は……文士のよもやま話を書きとめたものらしいことは……明らかである。

とだけしか述べられていない。[6] しかし私は、この『文士伝』には、そうした文士のよもやま話を綴った伝記としての性格のほかに、もっと違う側面があったのではないかと考える。その違う側面とは、結論から先に言えば、『文士伝』の大きな特色として、この書物が文士の作品を多量に収録していたということである。

もう一度、鍾嶸『詩品』中品の序を引用してみよう。

謝客の集詩に至っては、詩に逢へば即ち取る。張隲の文士は、文に逢へば即ち書す。諸英の志録、並びに義は文に在りて、曽て品題すること無し。

この中で注意すべきは、張隲『文士伝』とともに、「謝客の集詩」、すなわち謝霊運の『詩集』が批判の対象に挙げられている点である。

謝霊運の『詩集』は、『隋書』経籍志の集部総集類には五十巻と記されているが、今日では見ることができない。しかし、鍾嶸の言によれば、それは玉石が混淆した極めて不満足な詩のアンソロジーだったようである。

この謝霊運の『詩集』五十巻と並べて、「文に逢へば即ち書す」と批判されているのが張隲の『文士伝』である。鍾嶸の言葉を素直に読めば、「文に出会えば何でも書きとどめている」ということになる。鍾嶸の批判の鋒先は明らかに、取るに足らない作品を載せていることに対して向けられている。しかも、謝霊運と張隲の両書は「並びに義は文に在り」、すなわち「いずれも作品の収集に目的がある」というのである。

この点については、従来の『詩品』研究においても注目されては

いた。けれども、興膳宏氏が、

この書は題名通り文人の伝であり、鍾嶸のいうような散文の選集的性格があったかどうか疑わしい。

と述べているように、[7] これまで疑問視されていた。しかし、鍾嶸の言葉を信ずるならば、『文士伝』には文人の文学作品がかなり多量に収録されていたと考えるのが自然であろう。

『文士伝』が文学作品を多量に収録していたことを示す一つの証拠が、五十巻というその巻数である。

〈表一〉

巻数	部数
1～10	178
11～20	20
21～30	6
31～40	2
41～50	1
計	207

表一は、『文士伝』と同じように『隋書』経籍志の史部雑伝類に記されている書物の巻数と部数の度数分布表である。

この表を見れば、『文士伝』が雑伝としてはいかに破格の巻数をもっていたかがわかるであろう。また、同じように文士の伝を収めた摯虞『文章志』四巻・傅亮『続文章志』二巻・宋明帝『晋江左文章志』二巻・沈約『宋世文章志』二巻などと比べても、『文士伝』の五十巻は異常に多い。しかし、『文士伝』に総集的性格があったのであれば、摯虞『文章流別集』六十巻・李充『翰林論』五十巻・謝霊運『詩集』五十巻・同じく『賦集』五十巻などの当時の総集と比べても、『文士伝』の五十巻は決して多い巻数ではない。

『文士伝』が文学作品を収録していたことを示す別の証拠として、次のような『文士伝』の佚文がある。

○黄祖世子射、賓客大会。有獻鸚鵡鳥、射攀卮酒於禰衡曰「願先生為之賦。」（『太平御覧』巻九二四引『文士伝』）

○劉楨坐、厨人進瓜、楨為賦立成。（『太平御覧』巻六〇〇引『文士伝』）

『文士伝』の禰衡伝は『世説』言語篇注など計六箇所に、劉楨伝も同じく計八箇所に引用されているが、この二例は上記の箇所だけに引かれているものである。これらは一見した所、禰衡や劉楨の伝の一部のようであるが、実はそうではない。

○時黄祖太子射、賓客大会。有獻鸚鵡者、攀酒於衡前曰、「……願先生為之賦。」（『文選』巻一三禰衡「鸚鵡賦」序）

○楨在曹植座、厨人進瓜、楨為立成。（『太平御覧』巻九七八引劉楨「瓜賦」序）

とある通り、字句の異同は多少あるが、禰衡や劉楨自身の作品の一部なのである。

つまりこの場合、『太平御覧』は「禰衡『鸚鵡賦』序に曰く」・「劉楨『瓜賦』序に曰く」として引用すべきであった。ところが、こうして『文士伝』の書名を挙げてくれたことによって、『文士伝』に「鸚鵡賦」序や「瓜賦」序のような作品が収められていたことを我々は知り得た。また、張隲が伝を書くために彼らの序を借用したとしても、序だけでは何ら意味をなさないから、賦の全文（または一部）を引用していた可能性は十分に考えられる。

『文士伝』が作品を引用していたらしいことは、次の例からもわかる。

○陸景誡盈曰、「重臣貴戚、隆盛三族、莫不罹患搆禍、鮮以善終。大者破家、小者滅身。唯金張子弟、世履忠篤。故能保貴持

寵、祚鍾昆嗣。其余禍敗、可為痛心。（『太平御覽』巻四五九引『文士伝』）

この場合もわざわざ『文士伝』の書名を出す必要はない。現に、『芸文類聚』巻二三は「呉の陸景『誡盈』に曰く」として引用しているのである。

以上、『文士伝』が多量の文学作品を収めていたのではないかという私の考えを述べてきたが、それではこの書物はどのような傾向の作品を収めていたのだろうか。そして鍾嶸の「文に逢へば即ち書す」という評価は当たっているのだろうか。

これらの点については、実際のところほとんどわからないと言ってよい。考えてみればこれは当然なことであり、『文士伝』に多くの作品が収録されていたとしても、後世の人々がわざわざこの書物の名を挙げて引用する必要はなかったはずである。

この当時編まれた摯虞『文章流別集』をはじめとする多くの総集のすべてが滅び去ったが、それは、珠玉の作品だけを集めた『文選』の出現によって、それまでの玉石が混淆した総集の存在価値が失われたためである。張隲『文士伝』中の作品もその中に含まれる。しかし、『文士伝』には人々を惹きつける興味深いエピソードが載っていたために、完全には滅び去らず、かなりの断片が幸いにも今日まで伝わった。そして、偶然にも「鸚鵡賦」などの作品が収められていたことがわかったのは、更に幸いなことであった。

〈表二〉

人名	詩歌	賦	その他
桓麟	答客詩		
朱穆		蔚金賦	
趙壹		解擯賦	
禰衡		鸚鵡賦	
阮瑀	琴歌		
劉楨		瓜賦	
李康	遊山九吟		
嵇康	幽憤詩		与山巨源絶交書
張儼		犬賦	
張純		席賦	
朱異		弩賦	
陸績			渾天説
陸景			誡盈
張秉	千年歌詩		
何楨		許都賦	
張華			薦成公綏
左思		蜀都賦	
摯虞			答策
張載		濛汜賦	
束晳		餅賦	

潘尼		琉璃椀賦
孫丞		螢光賦

表二は、『文士伝』の佚文にあった作品名をすべて書き出したものである。

この表から『文士伝』に収められていた作品の傾向が類推できるが、文体でいえば賦が中心で、それも日常的な題材を詠んだ作品が多いようである。また、鍾嶸が「文に逢へば即ち書す」と言ったのは、あくまでも謝霊運の「詩」に対する措辞上のことであって、必ずしも「文」だけに限定していたのではないようである。

ただ、この表中の作品は伝の一部として名前を挙げられたものが大部分である。初唐の許敬宗（五九二～六七三）らの『文館詞林文人伝』一百巻は『文館詞林』一千巻のために編まれたが、『文士伝』の編者にそのような別の総集があったという話はどんな史書や目録を捜しても見当たらないし、恐らくなかったであろう。とすれば、伝記と総集とが分離していたのではなく、伝記の途中に作品を挿入していたとしか考えられない。つまり、『文士伝』は、従来のオーソドックスな伝記の形式を一歩も出ないが、編者の好みによって興味深いエピソードを載せ、しかもそれに付随する作品を数多く収録していたのであろう。

したがって、鍾嶸の「文に逢へば即ち書す」という評は、鍾嶸にとって文学的に重要だと認められない作品までも取り上げ、伝記中に書き留めていたのを批判したものと解釈すべきである。

五

さて最後に、張隲『文士伝』の文学批評史上における意義について述べたい。

まず、この『文士伝』が「文士」という規準によって人物を選んだ最初の書物であること、これはそれなりに評価すべきである。張隲の『文士伝』は、一冊の文学者の伝記であり、隋唐志には皆著録されている（隋志は誤って張隲に作る）。魏晋六朝時代の文学者は非常に多く、したがって文学者の伝記書もまた非常に発達した。隋唐志は倶に、摯虞の『文章志』四巻・傅亮の『続文章志』二巻・宋明帝の『晋江左文章志』二巻・沈約の『宋世文章志』二巻を著録し、『玉海』は邱淵之の『文章録』及び『別集録』・丘霊鞠の『江左文章録序』を著録している。文学者の伝記の中にも文学批評があるかも知れないが、文学批評の専門書と見ることはできない。

これは羅根沢氏が張隲『文士伝』を解説したものである。[8]

確かに、氏の言われる通り、魏晋六朝時代に文学者の伝記が発達した背景には、文学者を数多く輩出した当時の時代情況があったことは否定できない。ただ、氏がここに挙げた摯虞『文章志』以下の書物と張隲『文士伝』とは、その成り立ちや性格が違うということは注意すべきである。

摯虞の『文章志』は、総集の祖と称される文体別の『文章流別集』のいわば付録として書かれた人物別の伝記である。これに対して、張隲『文士伝』の方は後漢から六朝時代にかけて流行した雑伝の一種である。雑伝には、郷土の名士をあつかった先賢伝・耆旧

伝、隠者をあつかった逸民伝・高士伝、親孝行な人をあつかった孝子伝などがあるが、このような雑伝の一種として文人をあつかったのは、張隲『文士伝』以前に例がない。

また、羅根沢氏の「文学批評の専門書と見ることはできない」という指摘もその通りであり、『文士伝』の場合も、次のような簡単な批評が目につく程度に過ぎない。

○李康、……善屬文、辭藻清秀。（『北堂書鈔』巻九七引『文士伝』。「辭藻清秀」句、『太平御覽』巻六一四引『文士伝』作「詞藻清美」）

○（夏侯）湛、有盛才、文章巧思、善補雅詞、名亜潘岳。（『世説』文学篇注引『文士伝』）

○（潘）尼、少有清才、文詞温雅。（『世説』政事篇注引『文士伝』）

○（張）翰、有清才美望、博学善屬文、造次立成、辭義清新。（『世説』文学篇注引『文士伝』）

○（郭）象、作荘子注、最有清辭適旨。（『世説』文学篇注引『文士伝』）

○（束）晳、曽為餅賦諸文、文甚俳諧。（『世説』雅量篇注引『文士伝』）

これらの個々の文人に対する評は、一般の伝記書にもよく見かけるものであるにしても、重要な文学批評であることに変わりない。

しかし、より重要なのは、張隲が独自の規準に従って「文士」を選んだことである。因みに、私の調べた範囲で、『文士伝』の被採録者と思われる人々の名前を挙げると、次の通りである。

（後漢）張衡・桓驎・朱穆・延篤・張升・趙壹・劉梁・邊讓・侯瑾・蔡邕・禰衡・孔融・阮瑀・劉楨・王粲・陳琳・楊脩・丁儀・丁廙・張温・棗祗

（魏）王弼・李康・王粛・嵇康・阮籍・鄭冑

（呉）高岱・張純・陸績・陸景・殷基・張秉・華融・孔輝

（西晋）成公綏・棗據・王済・何楨・夏侯湛・孫楚・張華・束晳・陸機・陸雲・孫丞・左思・賈謐・曹攄・郭象・江統・摯虞・潘尼・杜育・顧栄・華譚・張載・棗嵩

（東晋）孫盛・江績

（宋）謝霊運

張隲がどのような規準で取捨選択したのか、序文など一切残っていないので、残念ながら窺い知ることはできない。けれども、有名・無名の文人が名を連ねたこの被採録者を見ると、今の我々が考えるよりも広い範囲で文人をとらえていたらしいことがわかる。あるいは、無名の文人たちにも我々の知らない作品が多くあったのかもしれない。いずれにせよ、編者の文学観が投影されていることは確かである。

次に、『文士伝』に文学作品を多量に収録していたとすれば、中国の文学批評における総集の重要性を我々は一層再認識すべきだろう。

詩文製作を不可欠の要素とする中国の知識人にとって、手本となる文体別の総集は便利であったに違いない。『文選』のようなすぐれた総集が重んじられたのも当然である。しかし、文学作品を鑑賞の対象として見た場合、その作品を書いた人が、どのような性格・容貌で、どのような生き方をし、どのような状況の下でその作品を書いたのか、大いに興味があるはずである。この点、日常的なエピソードに色彩られ、しかも作品を多量に収めた『文士伝』のような伝記が産まれる素地は十分にあった。裴松之に「虚偽妄作」だと酷評されながら『文士伝』が永く生命を保ち得たのも、こうした読者側の要望が色濃く反映されていると考える。

総集の良否を決めるのは、作品選択における編者の鑑識眼である。この点から言えば、鍾嶸に「文に逢へば即ち書す」と評された『文士伝』に収める作品は、あくまでも文人の伝記を書く上での補助資料であり、その意味では、編者の批評見識にささえられた詩文選集としては失格であった。けれども、編者の文学に対するすぐれた鑑識眼が発揮された総集だけが本当に尊いのだろうか。

文籍日興るも散じて統紀無し。是に於て総集作こる。一は則ち放佚を網羅し、零章断什をして帰する所有らしむるなり。一は則ち繁蕪を刪汰し、芟稗をして咸な除かしめ、菁華をして畢く出ださしむるなり。是れ固より文章の鑒衡、著作の渕藪なり。（『四庫提要』総集類序）

ここで述べられている総集の二つの機能の中で、我々はどうしても後者の方に目を向けがちである。しかし、例えば、孔子が三千篇の詩から三百篇を選んだといわれているが、こうして今日まで伝えられた『詩経』はそれ自体、確かにすぐれた文学作品である。が、もし万一、孔子が切り捨てた二千七百篇の詩が残っていたならば、とは誰しも考えることだろう。同様に、昭明太子が選ばなかった作品にもすぐれたものがあっただろうし、たとえつまらない作品であっても、それはそれなりに重要な意義を持っていたはずである。

今日の我々にとって、愚作を除いて秀作だけを収録した総集ももちろん大切であるが、滅びんとする「零章断什」を伝えようとした総集もそれに劣らず大切である。

『文士伝』の編纂意図はよくわからないが、私は東晋末期から宋初期と思われるその成立年代に注目したい。西晋の摯虞『文章流別集』以後、長い間総集が編まれた形跡はない。傅亮（三七四～四二六）が摯虞以後の空白をようやく埋めたのは、東晋末のことである。傅亮とほぼ同時代の謝霊運が『詩集』五十巻を編み、張隲が『文士伝』五十巻を編んだのも、滅びつつあった文学作品や忘れられつつあった文人の行跡のすべてを後世に伝えようとする意図に基づくものであると私は考える。

文士という規準によって編まれた最初の人物伝であるということ。しかも、多量の文学作品をも収録していたということ。この二点によって、五世紀初めに張隲という無名の一知識人によって編まれた『文士伝』の持つ意義は決して小さくない。

註

（1）興膳宏氏『潘岳・陸機』（筑摩書房・中国詩文選10）二〇一頁。
（2）張隲説を唱える人には、姚振宗（『隋書経籍志考証』）・許文雨（『文論講疏』）・古直（『詩品箋』）などがいる。
（3）張隲説を唱える人には、秦栄光（『補晋書芸文志』）・黄逢元（『補晋書芸文志』）・鄭徳坤（『水経注引書考』）などがいる。
（4）裴松之「上三国志注」を参照。
（5）華譚字令思、年十四、擧秀才、入洛、会宣武場。座有卞者、嘲南人諸君、「楚人、亡国之余。有何秀異、忽応斯擧。」衆無答。譚在下行、遙曰「当今六合斉軌、異人並出。吾聞、大禹出於東夷、文王生於西羌。賢聖之所在、豈常之有。昔武王伐紂、遷商頑民於洛邑。得無吾子、是其苗裔。」時咸改視、辯者無以応也。（『太平御覧』巻四六四引『文士伝』）
（6）詩品研究班「鍾氏詩品疏（九）」（『立命館文学』第三一四号）五一頁。
（7）興膳宏氏『文学論集』（朝日新聞社・中国文明選13）六九頁。
（8）羅根沢氏『中国文学批評史一』（上海・古典文学出版社）二一一頁。